

## 私と川のかかわり

The Relationship between Me and River



八ッ場ダム本体建設工事  
清水・鉄建・IHI 異工種建設工事共同企業体所長

清水建設株式会社 **平塚 毅**  
SHIMIZU CORPORATION Tsuyoshi HIRATSUKA

### 1. 砂漠からのスタート

入社早々から3年半、クウェイトで火力発電所を造ってきました。クウェイトに川はありません。古代文明発祥の地で有名なチグリス・ユーフラテス川も隣国のイラクを流れており、クウェイト国内はすべて砂漠の中でした。

降雨は年に1、2回お湿り程度、飲料水はペットボトルで100円/ℓ、対照的にガソリンは14円/ℓでした。

シャワーの水は重油を輸出したタンカーが、帰りにバラストとして積んできた水を買って使っていましたので、風呂上りの体が重油臭かったのを覚えています。

砂漠の砂は、風が来ればすぐ砂嵐となり、前が見えなくなり、店の中にも、部屋の中にも砂が入ってきます。食べ物の上にもかかってくるのを防ぎようがありません。

朝は寒くて防寒着を着、昼には60℃以上になるから目がくらくらして、サウナの中にいるようでした。

そんな砂漠から成田に着いたときの最初の印象は、日本が森と水に包まれたしっとりした国であることでした。深い緑が目刺さり乾いた自分の胸にしみこんでいく。

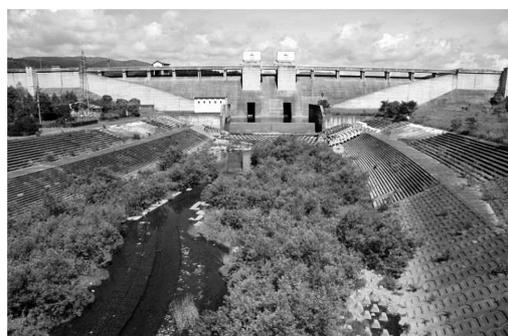
それと同時に感じたのがしっとり感でした。それは空気の持つ湿度の違いだけでなく、接する人の心にも感じることができました。

この時の経験から、ダム工事の住民説明会では、「人間はガソリンがなくても生きていけるけど、水がなかったら生きていけません」などと言うようになったのだと思います。

### 2. ダム工事1年生ピリカダム(北海道)

日本に帰国すると北海道のピリカダムに配属され、私にとってのダム1年生が始まりました。

クウェイトから北海道に来ると8月でも寒く感じられ、防寒着を着ていたなら、「今それ着てたら冬どうするつもり？」と言われて、戸惑いました。



ピリカダム(北海道)

日本での仕事は全く一からでした。日本にはいろんなところに暗黙の了解というのがあるが、元が日本人ですから、そんな考え方になじめないということもなく、次第にそこら辺のファジーな部分を身に付けていきました。

大きなダムの大きな組織の中で、像の大きさをつかめず、その鼻やしっぽや、耳など細かいところは良く見ていたつもりでも、全体がどう絡んでいるのかふわふわしてつかめない。そんな印象でした。

がむしゃらにやっているつもりでも、自分の中に確固たるものができてこない。

そんな中、休日と言えど火薬番の宿直で日本一の清流、後志利別川を眺めて過ごしました。

### 3. ダム経験者として

自分では確固たるものがなくても一人のダム経験者として千葉の南端、鴨川で保台ダムに転勤することとなりました。

ダム地点を流れる待崎川というのは、川幅2m、通常の水深は10cm、沢でももう少し大きいのがあから、小川というのがふさわしい川です。

小川を堰って10万㎡のコンクリートで止めてしまうことに、ずいぶん不釣り合いな感じがしました。それでも

農業用水として水をためてみると、古くから水争いが絶えなかった下流の農家に大きな恵みをもたらしたことを実感しました。

というのも、田植えを前に夜な夜な水路の堰を見張っている農家の人を見かけた時です。上流の田んぼへの堰の開度が厳しく決められており、それをごまかして少しでも広く開けると、下流の田んぼには水が行かなくなってしまうのです。昔は水争いで死人が出たと言いますが、平成の時代でも、その問題は解決されていなかったなどとは、考えてもいませんでした。

こんな小川で大変な事故が起きました。小川であることの油断があったと思います。時間雨量50mmの雨が2時間続きました。バケツをひっくり返したような雨は、仮設事務所の屋根を激しくたたきつけ、人の声も聞こえないくらいの状態でした。

現場では、仕上掘削を完了したばかりのところへ越流した濁流が流れ込んで大きな池になっていました。

段取りした型枠材が流出して下流に被害を及ぼすことを懸念した主任さんは、型枠材を係留しようとして流れてきたベッセルと岩の間に挟まれて命を落としました。

ダム工事とはいつも洪水の危険性と隣り合わせに進行しているのだということを、心に深く刻んだ出来事でした。



施工中の洪水（小河内ダム）

#### 4. それから

私はそれから岩手県の鷹生ダム、その後には島根県の尾原ダムに従事しました。

島根県の尾原ダムは出雲大社をはじめ古代神話で有名な出雲にあります。

ヤマタノオロチ伝説が洪水で暴れ狂う斐伊川から村を救ったという話、国引き伝説が、斐伊川の運んだ砂で、島と本土が陸続きになったことが由来している話、などを本気で信じました。

川と人間の営みの歴史の深さに対し、平成の世になってやっと終止符を打つのだと思うと、感慨深いものがありました。

工事中の洪水に際して、とにかく人命だけは失わないのだという、堅い教訓は生かすことができました。その



尾原ダム（島根県）

代わりに、川の水が引いてから流出した材料を不足なくすべて回収しなければなりませんでした。その結果、宍道湖まで10回ぐらいゴムボートで材料の回収作業をやりました。見つけたごみは、自分たちが出したものかどうか判別うんぬんしても疑いははれませんが、ついでに全部回収しました。工事開始前より間違いなく川はきれいになりました。

会社人生で5つ目のダムが山口県の平瀬ダムです。

ダム工事は最初から最後までいるとだいたい6年間ですから、会社人生で5つもダムに従事すれば、30年。これが最後のダムになるだろうと、そんな思いで従事しました。

平瀬ダムは県内でも有数の清流、名勝「錦帯橋」を流れる錦川の上流に建設される多目的ダムです。

支流にはオオサンショウウオが生息し、鮎つりや鶴飼を観光の目玉にしていることもあり、工事にあたり、いろいろな団体からお話がありました。話を通じて歴史的に川と人の営みは深くかかわってきたのだということを痛感させられました。

縁あって人生6つ目のダムとして昨年春に八ッ場ダムに赴任しました。

この地にあっても、長い歴史の中でそこに住む人の営みは川とともにありました。

川の形態が変わることは、そこに住む人の営みを変えることでした。

歴史とともにしみついた人の営みを変えることは、並大抵のことではないのですが、それを含めてダム事業があるということを感じました。

川のありがたさと恐ろしさ、そして長い歴史の中で人間の営みが川とともにあり、ダム工事によってそれをえざるを得ないことに、ある種畏怖の念を持たざるを得ません。

妻とのドライブで各地のダムを訪れるたび、温泉に紅葉に数多くの人に愛され始めたダムを見て八ッ場ダムが造りだす新たな自然をみんなが喜んでいただけたらと思うばかりです。